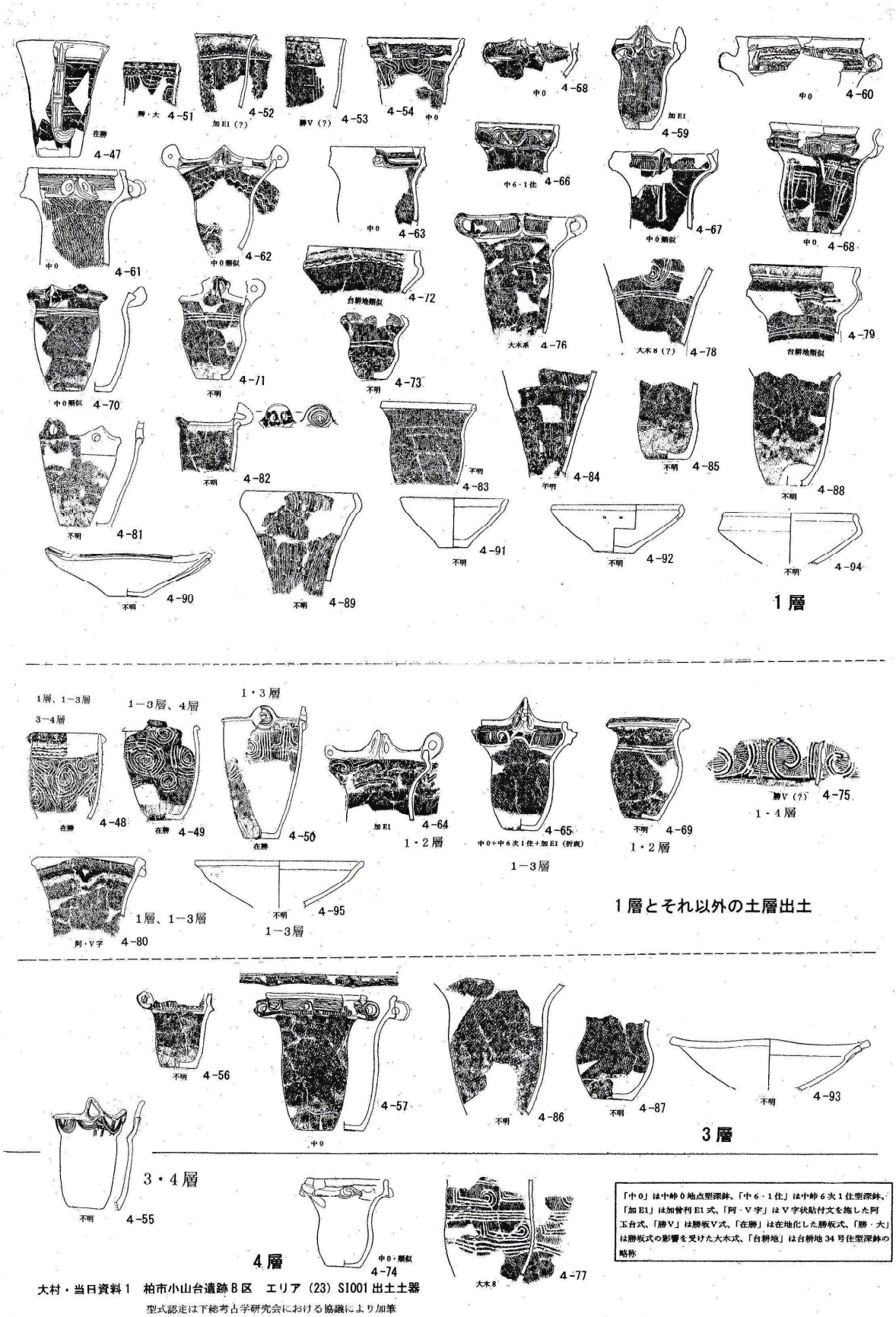
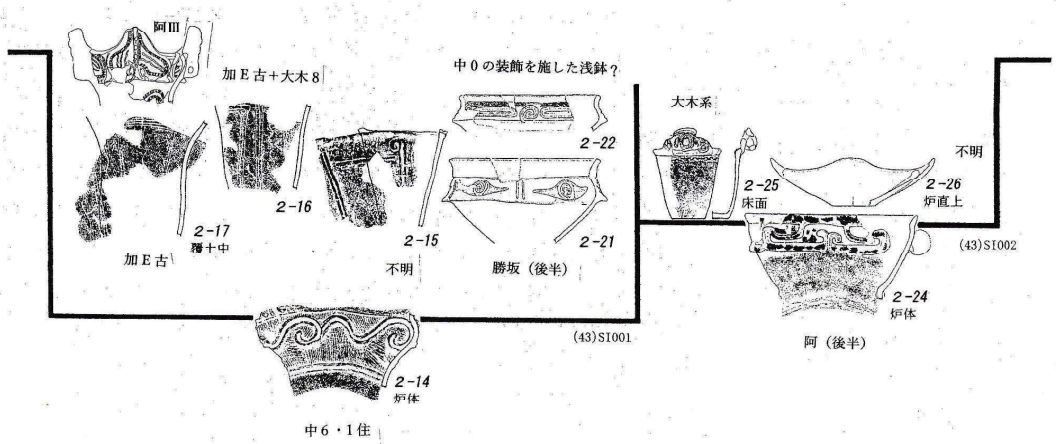
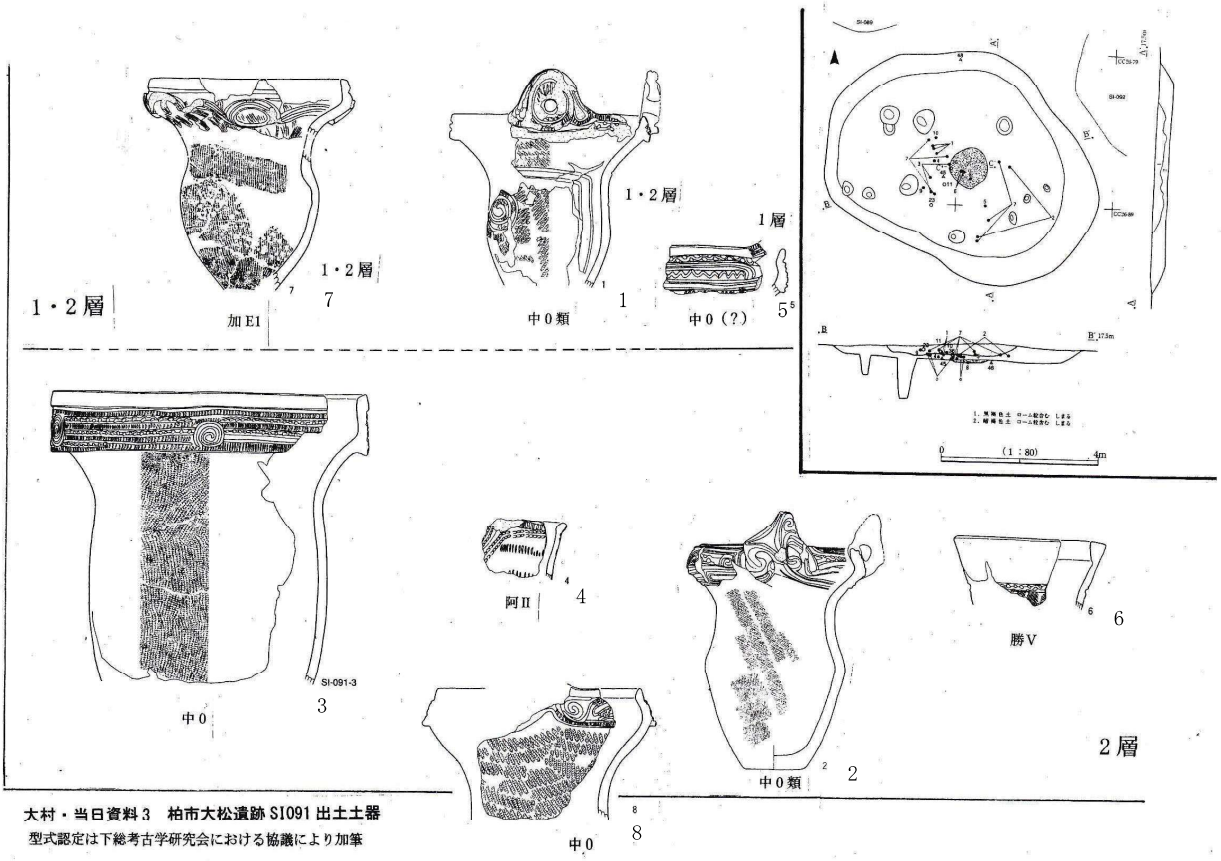


大村・当日資料1　柏市小山台遺跡B区　エリア（23）SI001出土土器

型式認定は下総考古学研究会における協議により加筆



大村・当日資料2　柏市小山台遺跡B区　エリア2（43）　SI001・SI002出土状況模式図
（西川ほか、2019 による）型式認定は下総考古学研究会の協議に基づき加筆。
SI001覆土中の阿玉台III式の図は報告書に基づき追加



大村・当日資料3　柏市大松遺跡SI091出土土器
型式認定は下総考古学研究会における協議により加筆

シンポジウム「加曽利E式土器の再検討」のまとめ

小林謙一

加曽利貝塚発掘100年という考古学史における節目を飾るシンポジウムを有意義に終えることができ、まずは私の拙い討論の司会にもかかわらず時間通りの進行にご協力いただいた発表者の皆様、参加者の皆様、および準備に努力いただいた千葉市立加曽利貝塚博物館の皆様、千葉市教育委員会、千葉市埋蔵文化財調査センターの皆様に厚くお礼申し上げます。

以下に、シンポジウムの討論における論点を、私なりに整理しておきたい。

１日目は、加曽利Ｅ式の成立期を中心に討議した。一つは大村氏が強調したように、研究史的な再検討である。山内清男が加曽利貝塚のＥ地点、Ｂ地点、Ｄ地点の資料をいかに整理したかという点について、今後、山内清男資料の中から具体的に示されることが望まれる。同時に層位的な検討としては、中期土器では主に竪穴住居ごとの一括出土例が層位的資料となるが、住居廃絶後の窪地への廃棄例が一般的で、その時間的な同時性は検討の必要性を伴うことが確認された。二つ目の論点として、関東の中でも東関東、西関東、北関東の地域性が問題となることが予想され、北関東の阿玉台式終末期の影響があったかどうかについて塚本氏の見解を確認した。さらに北関東の大木8a式に属する土器群や、北関東の地域型式についての検討も必要であるが、今回はそこまで及ばなかった。また、中峠諸類型について、中間型式としての中峠式から、東関東を中心に勝坂式終末から加曽利Ｅ式成立期に展開した諸類系として再設定された経緯が確認された。最後に、東西関東の加曽利ＥⅠ（またはＥ1）式の文様要素（口縁部区画内に西関東は縄文・撚糸充填が多いが東関東は沈線充填が多いなど）など型式内容の違いがかなり大きいことが、館氏が提示した資料を基に黒尾氏らにより再確認され、加曽利Ｅ式の成立に若干の時間差が存在する可能性や地域によって勝坂式終末期の土器と加曽利Ｅ式初現期の共存の可能性が指摘されているのに対し、地域毎に検討を加える必要があるが、今回は具体的検討には至らなかった。

２日目は、まず、加曽利Ｅ式中頃の話題として、千葉県における連弧文土器と曽利系土器のあり方について議論した。その中で、型式として設定できるかと、その系統性について意見が交わされた連弧文土器については、大網氏と小林との間で型式設定の可能性も取り沙汰された。一方で、東関東のリダクションされた曽利系土器については、西関東に多くみられた土器群が東関東へ広がる拠点として、東京都区部付近を中心とした東京湾西岸域に展開する「湾岸系曽利」と呼ばれる土器群が東関東と共通する要素を持つことが認められつつ、大内氏によりあくまで地域的な在地に変容した土器群との見方が共有された。

加曽利Ｅ式後半については、まず加曽利Ｅ式の算用数字編年とローマ数字編年の編年対比を試みた。加納氏と黒尾氏との編年対比において、おおよそ対応可能であるが、まだ一部にすり寄せられない部分が残るようにも思われた。東西関東の編年対比について、加曽利Ｅ式成立期に比べれば東西関東の差異は少なくなるが、連弧文系の終末などを含めて、さらに検討が必要であることが指摘された。それと同時に、研究史的にローマ数字と算用数字編年とが対応しきれない現状では、例えば新地平編年で対比をとる可能性や、次の終末期の段階の議論でも稲村氏から投げ返されたのであるが、炭素14年代による実年代で広域の交差年代を示す方向性がとれないかとの指摘もあった。この点については司会者の立場であるが、小林は地域毎に編年を進めた上で対比を図るべきこと、年代測定によって現在議論されている編年上の細かい

区分はできないことを指摘した。年代測定について補足するならば、どんなに測定や統計上の誤差が縮んでも10年以内の時間差は理論上不可能であり、現実的にも個別（ウイグルマッチングや連続的な測定などではない単独測定の複数例測定値間の比較では）には20年の時間差は現時点では不可能であるといえる。

中期末～後期初頭については、称名寺式は中津式と同一の土器を含むのではないかとの指摘と、加曽利ＥⅤ式の設定の是非、加曽利Ｅ式とされるうちは中期の範疇ではないか、といった点が議論となった。

称名寺式と中津式の関係については、中津式の系譜を引くことは間違いないが、関東においては当初から在地化した様相を示すこと、中津式が幅広く設定されており、その型式内容を整理する必要があることが、小澤氏により説明された。

加曽利ＥⅤ式については、稲村氏によりその設定の経緯について説明された上で、その系統性が堀之内式成立の時期まで繋がることもあきらかにされたが、大村氏らによる型式設定としての不備があるのではないかとの指摘もあった。

中期と後期の境について、小澤氏により山内清男に従えばあくまで土器によって区分される時期設定であること、研究史的に称名寺式土器成立を持って後期とすること、石井寛氏らの検討により、関東で最古と考えられる段階から在地化した様相がみられ中津式そのものではないことが説明された。

討論を通して、研究者間に共通の見解が生じたわけではないが、加曽利Ｅ式土器研究における問題点の共有は果たせたと考える。今後、東関東の加曽利Ｅ式土器の時期設定と型式内容を改めて整理し、埼玉編年や新地平編年など地域毎の編年体系と対比させ、実年代比定を試みていく必要があるだろう。

○質問への回答

・当日討論の場で十分に回答できなかった質問について、簡単にお答えします。なお、取り上げる質問は全員または小林に当てたものを中心とし、質問文については、簡略化するとともに小林が一部表現を改めていることをお許しください。

Q1　類型（タイプ・カテゴリー）に対する各発表者の考え方をご教示ください。

A1　全体としては共通した土器型式を用いる地域内でも、系統差、地域差など同一型式内でのバリエーション（類型、サブタイプなど）、集団・製作者による省略や変形（リダクションタイプ）、他の伝統土器群からの影響や搬入などを契機とした折衷土器などが、数多く認められます。研究者によって用語も定義も異なりますが、基本的には「土器型式」の下位概念として、類型・タイプ・型深鉢など、より細かな土器の動態をみるために差異をまとめるグループを設定することが研究上おこなわれます。各自の論文中で定義されるでしょう。

Q2　個々の土器型式ごとの編年研究と、特定の地域に対して時期設定をおこなう編年研究（新地平編年、埼玉編年など）の関係性とそれぞれの手法の長所・短所について。

「神奈川考古」と「下総考古」の研究活動の違いについて。

A2　２つの質問をまとめて答えます。まず、研究会活動としては、研究メンバーが地域毎にまとまった範囲でおこなう場合と、特定のテーマに即して広域から関心ある者が集まる場合があると思いますが、研究状況（埋蔵文化財行政に即した場合から特定のテーマに詳しい研究者が全国的に集まる場合まで）や研究

テーマに即しておこなわれるだけで、研究の本質に違いはないと思います。次に、共同研究であれ個人研究であれ､「加曽利Ｅ式土器の編年研究」とした場合と「南西関東の中期後半の時期設定」とした場合には、対象の違いはあるが、土器編年研究とした場合の本質に違いはないと思います。土器群の時間的・空間的動態（時期設定、空間分布、系統性）をあきらかにする内で、同一地域内または周辺地域の他系統の土器群との関係もみることはおこなわれるので、最初に型式を区切るか、地域を区切るかという分析手法の違いでしかないと思います。ただし、個別的には地域や土器型式のあり方によって、研究手法には自ずと違いが生じると思います。

Q3　加曽利Ｅ式土器の問題点について具体的に教えてほしい。
A3　加曽利Ｅ式土器成立（阿玉台式終末期、大木式土器成立との関係、中峠諸類型（深鉢）の位置づけ、東西関東での成立状況の違い)、加曽利Ｅ式のローマ数字編年と算用数字編年での混乱解消、連弧文土器・曽利系土器の整理、加曽利Ｅ式終末期（いわゆる加曽利ＥⅤ式）の評価が問題となっています。縄文時代を代表する土器文化の一つであり、その土器群の形成・展開・収束は、土器文化のあり方を探る上での好例なので、更なる研究が必要です。

Q4　加曽利ＥⅣ・ＥⅤの分類は、層位的な根拠があるのか？
A4　加曽利ＥⅣまたはＥ４式と、現在仮称されている加曽利ＥⅤ式は、稲村晃嗣氏による設定当時、称名寺式土器に伴う加曽利Ｅ式土器をさして設定されました。敷石住居の複数の埋甕のうち、片方が称名寺１式、片方が加曽利Ｅ式であるなどの事例をもって両者の共伴を捉えていましたので、広義での層位的事例を扱っていたといえます。黒尾和久氏・小澤政彦氏が整理した緑川東遺跡 SV－１遺構では、敷石下では加曽利Ｅ系土器が、敷石面では北白川Ｃ式相当の土器と加曽利Ｅ系の土器、覆土からは初期称名寺式と加曽利Ｅ系の土器が出土するなど、住居の構築状況による層位的検討例は増えつつあります。一方、加曽利ＥⅣ式またはＥ４式と称名寺式に伴う加曽利ＥⅤ式とされる土器との型式的な差は少なく、隆線上から縄文が施紋されるかなどの些末な違いしかないとされており、土器型式として区分されるかという点で疑問も提起されています。土器編年では、中期と後期を土器型式で時期区分しますが、その観点からも西日本の北白川Ｃ式・中津式系の土器の影響が強い称名寺式の成立を持って後期とするのか、加曽利Ｅ式系の土器が存続する時期までを中期ととらえるべきなのかについて、本シンポジウムの中でも議論が必要と提起しましたように、土器型式の区分については、さらなる検討が必要となっています。

令和 6 年度加曽利貝塚 E 地点・B 地点発掘 100 周年記念シンポジウム

加曽利Ｅ式土器の再検討【記録集】

2025 年 3 月 26 日発行

編集・発行　千葉市立加曽利貝塚博物館

本記録集の文章・図版等の無断転載及び複製等はご遠慮ください。